

## 現代英語の接尾辞-ish の用法の拡大について

小林 紗佳

(言語文化学部 英語専攻)

キーワード：英語，接尾辞，コーパス，辞書

### 1. はじめに

現代英語で用いられる接尾辞-ish は、文法書である Quirk et al. (1985)では名詞と形容詞に接続すると説明されている。しかし、-ish に関する研究である Oltra-Massuet (2017)は、-ish は形容詞、名詞、動詞、数詞、副詞、句などあらゆるカテゴリーの語と結びつくことができ、さらに自由形態素としてそれ単体でも現れうるとしている。

本稿は、現代英語の接尾辞-ish の用法の拡大について、コーパスを用いて調査を行い、その結果得られたデータから考察を行うことを目的とする。なお、本文中の例文番号、図表番号、日本語訳については特に断りのない限り筆者によるものとする。

### 2. 先行研究

本節では、2.1.節で現代英語に関する大規模な文法書である Quirk et al. (1985)、2.2.節と 2.3.節でそれぞれ-ish に関する研究である梅原(2001)、Oltra-Massuet (2017)の内容をまとめる。

#### 2.1. Quirk et al. (1985)

以下、Quirk et al. (1985: 1553)に記述されている-ish の2つの用法を要約して示す。

[i] 具象名詞<sup>1</sup>(concrete nouns)と結びつき、‘somewhat like’の意味を表す(例: childish, monkeyish, foolish, roguish, snobbish)。形容詞語幹と結びつき、‘somewhat’の意味を表す(例: coldish, brownish)。人間の年齢と結びつき、‘approximately’の意味を表す(例: sixtyish)。*‘She’ll arrive about tenish’*のような用法もある。

[ii] 人種、民族、言語の名前と結びつき、比較できない形容詞、或いは(言語の場合は)名詞を形成する(例: Swedish, Cornish, Turkish)。

(以上、Quirk et al. 1985: 1553 を要約)

#### 2.2. 梅原 (2001)

梅原(2001)は、-ish が現代英語においてどのような語に結びつくかを辞書を用いて調べた。調査では、CD-ROM 版のリーダーズ・プラス英和辞典の後方一致検索を使用し、見出し語として登録されている接尾辞-ish を伴う形容詞を抽出した。抽出した語のうち、British, English, Spanish などの国名形容詞を除く語について、-ish が結びついている語を品詞別に分類すると以下の表の通りになる。

<sup>1</sup> 日本語訳は高橋・笠原・東(編)(2012)による。

表 1: -ish が結びつく語の品詞別分類

品詞	名詞	形容詞	副詞	動詞	接続詞	不明	合計
語数	323	122	3	3	1	9	461
比率(%)	70.0	26.4	0.7	0.7	0.2	2.0	100

(梅原 2001: 5 を一部改変)

結びつく語が形容詞の場合については、最初は色彩形容詞に結びつきが限られていたが、現在では結びつく形容詞に制限は無く、単音節語であればどの形容詞とも結びつく可能性があるとしている。

(以上、梅原 2001: 4-5, 11 を要約)

### 2.3. Oltra-Massuet (2017)

Oltra-Massuet (2017)は、-ish の形態統語論的、意味論的な分析を試みた研究である。以下、Oltra-Massuet (2017: 54-57)の内容を要約して示す。なお本節の例文では、-ish が結びついて語をイタリック体で示す。

-ish は、形容詞、名詞、動詞、数詞、副詞、句などあらゆるカテゴリーの語と結びつくことができ、さらに自由形態素としてそれ単体でも現れうる。そして、このように品詞をまたいだ統語論的な分布は英語の接尾辞の中では他に例がないとしている。

Oltra-Massuet (2017)は Google Books Corpus、イギリス英語のコーパスである British National Corpus (BNC)、アメリカ英語のコーパスである Corpus of Contemporary American English (COCA)と Corpus of American Soap Operas (CASO)、20 か国の話者のデータを収集した Corpus of Global Web-Based English (GlobWE)で -ish の用例を収集した複数の文献から用例を引用し、形容詞や名詞以外のものと結びつく、或いは単独で現れる -ish の用例の形態統語論的、意味論的分析を行っている。以下、(1)は句に続く -ish の例、(2)は単独で使われる ish の例である。加えて -ish は、(3)や(4)のように民族の名前と結びついて比較可能な形を作ることもできる。

(1) a *man-in-the-streetish* sort of opinion

(世間一般の人みたいな類の考え)

(Morris 1998: 208)

(2) Mac: You've got a plan. right?' (君は何か思いついたんでしょう?)

Veronica: '... *ish*.' (…まあね。)

(Bochnak and Csipak 2014: 435)

(3) He was very *English*, but as everyone said, he was a great American

(彼はとてもイギリス人的だったが、皆が言ったように、彼は偉大なアメリカ人であった。)

(4) The milk and products could be marketed as a very *Scottish* speciality food

(牛乳と生産品はとてもスコットランド的な名物として売られうるものだった。)

(Oltra-Massuet 2017: 66)

(以上、Oltra-Massuet 2017: 54-57 を要約)

### 3. 先行研究のまとめと問題点

Quirk et al. (1985)では、-ish が結びつく語として名詞と形容詞のみが挙げられている。梅原(2001)の調査では、結びつく語が副詞、動詞、接続詞のものも出現しているが、その数が

少ないため例外的なものとして検討の対象から外されている。それに対し Oltra-Massuet (2017)では、-ish は動詞、副詞、句なども含むすべてのカテゴリーの語と結びつく可能性があるとし、さらに-ish 単体でも現れうるとしている。このことから、文法書や辞書に記載されていない用法についてさらに調査する余地があると考えられる。

Oltra-Massuet (2017: 54)では、-ish は形容詞、名詞、動詞、数詞、副詞、句などあらゆるカテゴリーの語と結びつくことができ、さらに自由形態素としてそれ単体でも現れうるとしているが、各品詞に-ish が接続する用例や単体で現れる-ish がそれぞれいくつ現れたのかについては明らかにされていない。そのため、各用例の数を具体的に示し、-ish が名詞や形容詞以外に接続する用例があるかどうかを調査する必要があると考えられる。

#### 4. 調査

コーパスを用いて-ish が結びつく語を抽出し、高橋・笠原・東 (編) (2012)に基づいて-ish が結びつく語の品詞を調査する。コーパスにはアメリカ英語のコーパスである Corpus of Contemporary American English (COCA)、アメリカ英語の話し言葉コーパスである Corpus of American Soap Operas (CASO)、イギリス英語のコーパスである British National Corpus (BNC) の3つを用いる。COCA には1990年～2017年までの5億6000万語が収録されており、ジャンルが話し言葉 (spoken)、物語 (fiction)、雑誌 (popular magazines)、新聞 (newspapers)、学術的文章 (academic texts)に分類されている。CASO には2001年から2012年にかけてのアメリカのソープオペラ<sup>2</sup>の台本22,000本から抽出された1億語が収録されており、非常に口語的な表現を調べるのに使われている。BNC には20世紀後半のイギリス英語1億語が収録されており、最新版は2007年に公開されている。1億語のうち90%が書き言葉、10%が話し言葉であり、書き言葉のデータには新聞、雑誌、学術的文章、物語、手紙、大学のレポートなどからの抜粋が含まれている。話し言葉のデータは、異なる年齢、地域、社会的階層から人口統計学的にバランスのとれた方法で選出されたボランティアによってなされた、原稿のないくだけた会話を書き起こしたものである。

なお、以下本稿全体を通して、用語を以下のように定義する。

「用例数」…-ish で終わる語が異なる語または句としてコーパスに出現した例の数(異なる語や句がいくつあるかを表す)。異なり語句1つにつき1例と数える。

「出現回数」…-ish を含むひとつの語または句がコーパスに現れた回数(それぞれの異なり語句につき例文がいくつ現れたかを表す)。例文1つにつき出現回数を1回と数える。

##### 4.1. 調査方法

3つのコーパスを用いた検索すべてにおいて、-ish で終わる語が検索結果として出てくるよう、“\*ish”という形で入力した。検索結果の語の品詞は形容詞と指定した。COCA と CASO では-ish で終わる文が異なり語ごとに分類され、-ish で終わる語が一覧で表示される。それ

<sup>2</sup> テレビ、ラジオで放送される連続メロドラマのこと。アメリカでスポンサーに石鹸の会社が多かったことからこのように呼んでいる(松村 2012)。

に対し、BNC では-*ish* で終わる文が異なり語ごとに集計されず、-*ish* で終わる語を含む文が一覧で表示されるため、そのままでは-*ish* で終わる異なり語のそれぞれの出現回数を確認することができない。そのため BNC の調査では、大量のデータを集計できる機能である Excel のピボットテーブルを使用し、-*ish* で終わる異なり語数とそれぞれの出現回数を集計した。COCA では出現回数上位 1,000 語について、CASO と BNC ではすべての語について、-*ish* が接続する語の品詞を高橋・笠原・東（編）(2012)を用いて調査した。なお、高橋・笠原・東（編）(2012)において複数の品詞が記述されている語については、一番上に挙げられている品詞を採用した。ただし、品詞ごとに意味が異なっていた場合は必ずしも一番上の品詞を採用したのではなく、検索結果の前後の文脈から判断してより適切だと筆者が考えた方の品詞を採用した。検索結果の語のうち明らかに当該形式ではないと筆者が判断したもの<sup>3</sup>は手作業で除外し、表 2 の「対象外」の項目に入れた。調査の対象に入れるべきかどうか判断に迷うものは表 2 の「不明」の項目に入れた。さらに、今回の調査では辞書に掲載されていない用法に焦点を当てるため、抽出されたそれぞれの語がそのままの形で(-*ish* を含む形で)高橋・笠原・東（編）(2012)に掲載されているかどうか調べた。

#### 4.2. 調査結果

調査の結果抽出された異なり語数は表 2 の通りである。句に後続しているものは、最も-*ish* に近い(-*ish* が直接接続している)要素の品詞に応じて分類した(例: *boy-scoutish* の場合、*scout* が名詞であるため名詞として数えた)。なお()内の数字は辞書に掲載されていない語<sup>4</sup>の数である。割合については小数点以下第二位を四捨五入した。

表 2: 各コーパスでの調査から抽出された異なり語数

		COCA	CASO	BNC	合計	
					用例数	割合(%)
名詞	国名、民族名、言語名	274 (5)	15 (0)	208 (0)	497	25.7
	数詞	28 (15)	7 (4)	21 (13)	56	2.9
	その他	294 (111)	65 (18)	278 (110)	637	32.9
	小計	596 (131)	87 (22)	507 (123)	1,190	61.5
形容詞	色彩	19 (0)	14 (0)	17 (0)	50	2.6
	その他	76 (18)	10 (5)	114 (35)	200	10.3
	小計	95 (18)	24 (5)	131 (35)	250	12.9

<sup>3</sup> *main-dish*, *hashish*, *reestablish*, *two-fish* など、-*ish* の直前までの部分に-*ish* がついたとは考えにくいもの。

<sup>4</sup> 「単独での使用」「不明」「対象外」の語以外について調査し、-*ish* を含む後半の要素全体に前半の要素がついたと考えられるもの(*Irish-British*, *over-lavish* など)については、後半の要素(ここでは *British* と *lavish*)が辞書に載っている語は辞書に載っているものとした。ただし、*blue-reddish* のように、*blue-red*(「青と赤との中間色、紫系統の色」、訳は高橋・笠原・東（編）(2012)による)という語全体に-*ish* がついたと考えられるものについては、後半の要素である *reddish* という形が載っていても、*blue-reddish* という形で記載がなければ記載されていないものとして数えた。

動詞	13 (2)	6 (0)	11 (0)	30	1.5
副詞	2 (1)	2 (2)	8 (6)	12	0.6
単独での使用 <sup>5</sup>	1	1	1	3	0.2
対象外	185	10	57	252	13.0
不明	108	30	61	199	10.3
合計	1,000 (152)	160 (29)	776 (164)	1,936	100.0

さらに、辞書に記載がない用例がその項目の全用例に占める割合をコーパス別にグラフで示す。なお、割合は小数点以下第二位を四捨五入した。

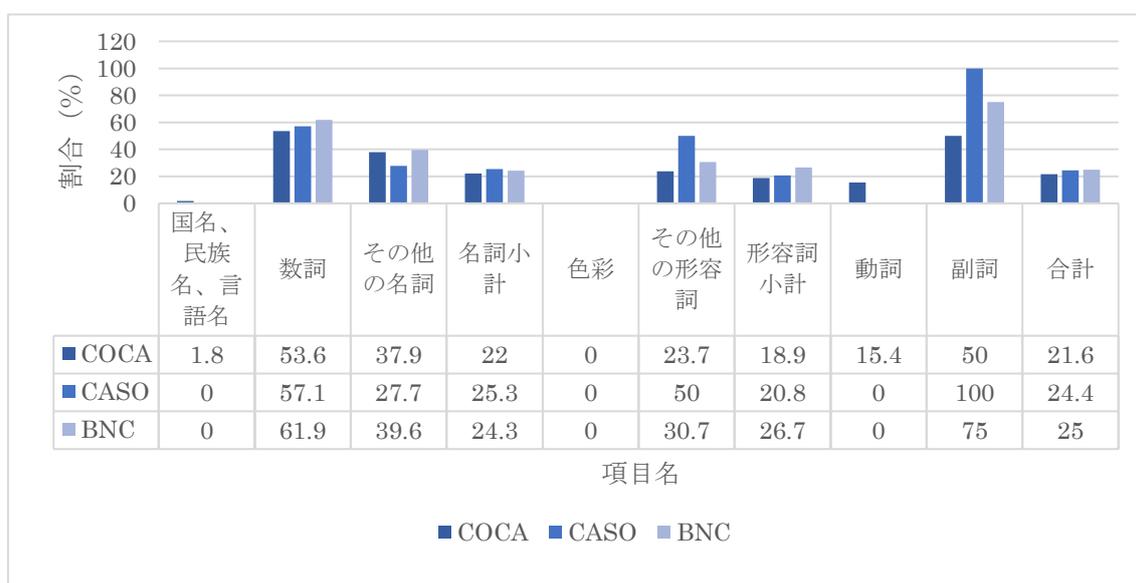


図 1: 辞書に記載がない用例の割合

対象となるすべての用例のうち辞書に記載されていない用例の割合は、COCA で 21.6%、CASO で 24.4%、BNC で 25.0%と、コーパス間における割合の大きな差はみられなかった。このことから、アメリカ英語とイギリス英語での-ish の使用の拡大の程度には、全体の傾向としては大きな差がないということが示唆される。

以下、-ish が接続する語の品詞別にそれぞれ例文を挙げる。なお、-ish とそれが接続している語または句をイタリック体で表し、例文の後にはその文が抽出されたコーパスの名前を示している。例文番号の直後の[]内には-ish が接続する語または句を-ish を除いた形で示し(例文(5)を除く<sup>6</sup>)、その後その語が表 2 のどの項目に分類されるかを示している。

<sup>5</sup> 表 2 の数値は出現回数ではなく用例数(異なり語数)であるため、単独での使用がみられた場合には 1 としている。

<sup>6</sup> 例文(5)の Chinglish については、-ish が接続する語を特定することができなかつたため、接続する語を示していない。

(5) [国名、民族名、言語名] “We grew up speaking Chinese and English,” she says, “and called it *Chinglish*. ...” (COCA)

(「私たちは中国語と英語を話して大きくなった。そしてそれを *Chinglish* と呼んだ。」と彼女は言った。)

(6) [ten/数詞] We were staying in a hotel in Maidstone and we went back for a meal, then later, about *tenish*, we sneaked back to see if there was anything going down. (BNC)

(私たちはメイドストーンにあるホテルに泊まっていたが、その後、だいたい 10 時頃、こっそりと戻って何か起きていることがないか確認した。)

(7) [verb/その他の名詞] Second, the verbal items in the poem are ‘considerably deverbalized’, in that the great majority are participles or infinitives, and only five (e.g. ‘holds, ‘put’) are in finite groups in free clauses, the most ‘*verbish*’ use of verbs. (BNC)

(2 つ目に、詩における動詞的項目は『かなり非動詞化されている』。それは、大部分は分詞か不定詞であって、たった 5 つのみ(例: holds, put)が独立した節の中の定のグループにあり、言い換えれば最も『動詞らしい』動詞の使い方ということになるからである。)

(8) [normal/その他の形容詞] And she's trying to get used to her new *normal-ish* life since her husband passed away. (CASO)

(そして彼女は夫が亡くなってから、新しく平凡なような生活に慣れようとしている。)

(9) [fribble/動詞] ...his library is indeed as *fribblish* as himself,... (COCA)

(…彼の書齋は本当に彼と同じくらいくだらないもので、…)

(10) [early/副詞] I'm free *earlyish* on Monday. (BNC)

(私は月曜の早めの時間は空いているよ。)

2.1.節で取り上げた Quirk et al. (1985)の記述では、-ish は具象名詞と結びつくとしており、抽象名詞については言及がないが、例文(7)より、-ish は verb のような抽象名詞にも接続していることが分かる。

以下の例文は、それぞれ-ish が単独で使用されていると筆者が判断した例、-ish が句に接続する例である。

(11) ...and every schedule is subject to the “*ish*” factor. “That means we'll arrive about *twoish* or leave around *fiveish*,” ... (COCA)

(そしてあらゆる予定は「だいたい」という要因に左右される。「つまり、だいたい 2 時に着くとかだいたい 5 時に出発するなどといった意味である。」)

(12) [marching band] It's kind of circusy and *marching bandish*. (COCA)

(それは少しサーカスのようで、マーチングバンドのようだ。)

## 5. 考察

本節では、5.1.節で出現回数と辞書記載の有無との関係、5.2.節でハイフンの有無と辞書記載の有無との関係について考察する。

### 5.1. 出現回数と辞書記載の有無との関係

以下の図 2 は、各コーパスから得られた用例を出現回数が多い順に 100 例ずつに分け、辞書に記載がない用例の数とそれが占める割合を示したものである。なお、CASO の 101～200 位の欄は 101 位から 160 位までの 60 例、BNC の 701～800 位の欄は 701 位から 776 位までの 76 例をそれぞれ対象としている。割合は小数点以下第二位を四捨五入した。

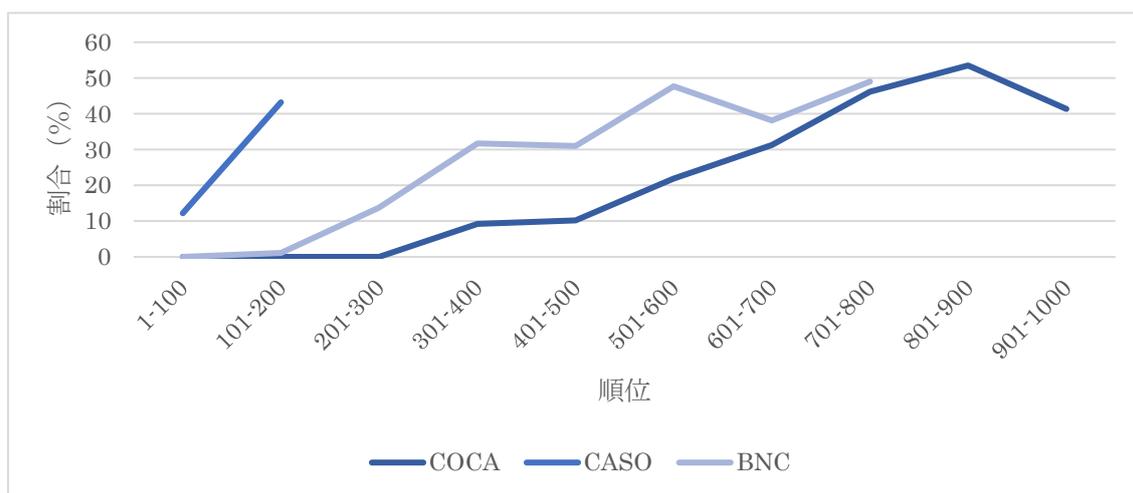


図 2: 出現回数と辞書記載がない用例の割合の関係

3つのコーパスすべてにおいて、出現回数の順位が低いほど、つまり出現回数が少ないほど、辞書に記載されていない用例の割合が増加する傾向がみられた。ただし、BNC の 301～400 位と 401～500 位、BNC の 501～600 位と 601～700 位、および COCA の 801～900 位と 901～1000 位をそれぞれ比較すると、それぞれ後の方が割合が低下しているという結果になった。これは、BNC では出現回数の順位 340 位から 776 位までがすべて出現回数が 1 回の例であり、COCA では出現回数の順位 704 位から 1000 位までがすべて出現回数 2 回の例であるため、出現回数の差異がなく、辞書に記載のない用例の割合に影響を及ぼさなかったためであると考えられる。このように、出現回数に差異がないことによる結果のばらつきがみられたものの、全体の傾向としては、概ね出現回数の順位が低いほど辞書に記載のない用例の割合が増加していることが観察できる。

### 5.2. ハイフンの有無と辞書記載の有無との関係

ハイフンがある用例について、辞書記載の有無別に分けると以下の表のようになる。なお、ハイフンを除いた形(self-ish という形で出現した場合は selfish という形)で辞書に記載されているものについては記載があるものとして集計した。

表 3: ハイフンがある用例の辞書記載の有無別の集計結果

	辞書に記載がある用例		辞書に記載がない用例		合計	
	用例数	割合(%)	用例数	割合(%)	用例数	割合(%)
COCA	33	33.0	67	67.0	100	100.0
CASO	7	26.9	19	73.1	26	100.0
BNC	22	30.1	51	69.9	73	100.0
合計	62	31.2	137	68.8	199	100.0

上の表より、3つのコーパスすべてで、ハイフンがある用例のうち辞書に記載がない用例の割合は7割前後であることが明らかになった。一方図1より、本稿で考察対象とする全用例のうち辞書に記載がない用例の割合はそれぞれ2割程度である。すなわち、ハイフンがある用例に絞ると辞書に記載がない用例の割合が大きく増加するということが分かる。これは、ハイフンの存在によって-*ish*とそれが接続する要素との境界が明らかになることから、辞書に記載がないような使用頻度が低い用例にハイフンを用いることで、-*ish*が一時的に結びついてできた語句であるということを示す役割をハイフンが果たしているためであると考えられる。

## 6. おわりに

本稿ではコーパスを用いて-*ish*で終わる語を検索し、その結果辞書に記載されていない語や文法書に言及がない用例を抽出した。コーパスから得られたデータをもとに考察を行い、得られた結論を以下に箇条書きで述べる。

- ・出現回数の順位が低いほど、辞書に記載されていない用例の割合が増加する。
- ・辞書に記載されていない用例の割合は、本稿で対象とする全用例に占める割合は2割程度であるが、ハイフンがある用例に絞ると7割前後となり、大きく増加する。

### 参考文献、参考資料

<外国語の文献>Bochnak, Ryan, and Eva Csapak (2014) 'A new metalinguistic degree morpheme'. In *Proceedings of Semantic and Linguistic Theory (SALT)* 24: 432-452. / Morris, Lori (1998) 'A toughish problem: The meaning of -ish'. In *LACUS Forum* 24: 207-215. / Oltra-Massuet, Isabel (2017) 'Towards a Morphosyntactic Analysis of -ish'. In *Word Structure* 10.1: 54-78. / Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman. <日本語の文献>梅原敏弘(2001)「接尾辞-*ish*の機能と生産性について—一日英語比較の視点から—」『英文学』30, 1-20. 駒澤短期大学英文科. / 高橋作太郎・笠原守・東信行(編)(2012)『リーダーズ英和辞典第3版』東京: 研究社. / 村松明(監修)(2012)『大辞泉 第二版』東京: 小学館.<参考資料>British National Corpus <http://bncweb.lancs.ac.uk/> (最終閲覧日: 2020年1月5日) / Corpus of American Soap Operas <https://www.english-corpora.org/soap/> (最終閲覧日: 2019年12月2日) / Corpus of Contemporary American English <https://www.english-corpora.org/coca/> (最終閲覧日: 2019年12月23日)